

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32711

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13108

研究課題名（和文）アメリカ文化における育児を担う父親のメロドラマ的表象と新自由主義

研究課題名（英文）Neoliberal Melodrama of Nurturing Fathers in the U.S.

研究代表者

関口 洋平（Sekiguchi, Yohei）

フェリス女学院大学・文学部・助教

研究者番号：00837255

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の概要は2023年4月に発表された単著『「イクメン」を疑え！』（集英社新書）にまとめた。本書のなかでは父親の育児に焦点を当てた日米の文化作品を様々な角度から分析しながら、そうした作品が新自由主義的な文脈の中で、育児と仕事を一人で両立する男性を美化していることを論じた。逆に言えば、そうした作品のなかで見落とされているのは現実の社会のなかに存在しているケアのネットワークである。仕事と育児を両立可能な一部のエリート男性が称賛される一方で、ケア労働者の社会的な地位が一向に改善しない背景には、すべての領域を経済的なものさしから測る新自由主義のイデオロギーが存在していると本論では結論づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「子育てをする男性」がこれまで日米の文化のなかでどのように表象されてきたかを検討する本研究は、男性の育児参加が急務となっている現在の日本において重要な意義を持っている。本研究では男性の育児が新自由主義的な価値観の中でビジネススキル的一种として位置づけられ女性の育児と差別化されること、また「イクメン」という文化のイメージが高学歴の男性をモデルにしており、低所得者層の男性に対する育児支援が必要であることを議論した。

研究成果の概要（英文）：The outline of my study is summarized in my book "Ikumen wo Utgae" (Shueisha Shinsho), which was published in April 2023. In this study, I analyzed Japanese and American culture which shed light on fathers who take care of their children. Neoliberalism helps such cultural artifacts construct unrealistic images of fathers who juggle their work and family, while the network of care is made invisible. While some elite men who can juggle their work and family are praised, neoliberalism's human capital theory underevaluates the value of care workers.

研究分野：アメリカ研究

キーワード：育児 新自由主義 メロドラマ アメリカの家族 アメリカ文学 アメリカ映画

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初において、日本では「イクメン」という言葉が少しずつ浸透し、徐々にではあるが父親が育児に参加することも多くなってきた。その一方で、メディアに登場する「イクメン」のイメージには階級的な意味で偏りがあったため、本研究においてはメディアによって作られた（そして主要な政策がターゲットとしてきた）「イクメン」像を批判的に再検討することを目的としている。また、日本ではアメリカにおける保育制度や父親の育児に関しては十分な理解が浸透しておらず、本研究ではアメリカにおける育児の歴史と現状を人種や階級といった要素を組み込みつつ批判的な観点から検討し、一般読者にわかりやすく説明することを目的としたものである。

具体的には、日本のメディアにおいて注目されることが多かった「イクメン」は概して高学歴のエリート男性であり、低所得者層の男性に対するサポートが議論からは抜け落ちてきた。また、近年「取るだけ育休」という言葉が注目され、育休をとっても家事や育児の負担を女性に押し付ける父親がいまだに多いことが報道されたことからわかるとおり、子育てをする男性に関する議論には女性からの視点が欠如している。本研究ではそのような背景を考慮して、日米の文化作品のなかに女性の視点がどのように組み込まれている（あるいは組み込まれていない）かを分析した。

また、「イクメン」が議論にされるとき、父親が育児をするべきなのか、母親が育児をするべきなのかということが問題となる傾向があるが、そこに抜け落ちているのは子育ては社会であるものという視点である。「父親か母親か」という二項対立を脱して社会という要素を組み込むことにより、本研究では「イクメン」の言説のなかで軽視されがちであるケア労働者の存在にも理解を深め、ケアという営みを個人で行うのではなくネットワークの一部として考えることを目指した。

2. 研究の目的

日本においては現在でもジェンダーの不平等が著しく、男性が育児に参加することが急務となっている。また、ジェンダーに関しては日本は「遅れて」いて、アメリカをはじめとする欧米諸国は「進んで」いるという理解が一般的であるが、アメリカという社会においてケアがどのように提供されているのか、ケアという点でアメリカは日本のモデルとなるのかという点に関しては十分な理解が蓄積されていない。アメリカでは「個人」のジェンダー意識が進んでいる一方で、国家が育休の制度を保障しておらず、また保育園等の整備も市場原理に委ねられており、中間層にとっては子育ての金銭的負担が厳しく、それを親族等のネットワークを活用しながらやりくりしているという現実がある。

本研究ではそのような状況のなかで、アメリカにおける「個人」のジェンダーに対する意識を単に称賛するのではなく、アメリカという「社会」がケアの問題をどのように扱ってきたのかを詳しく分析し、新自由主義という観点から日米の文化や政策を批判的に論じるものである。新自由主義がケアの問題にどのような影響を与えてきたのかという点に関しては、近年「ケアの倫理学」についての注目が急速に深まっていることもあり、さまざまな種類の先行研究があるものの、それを男性の育児に限定して考察した論者はこれまでにほとんど存在しない。また、男性の育児を社会学的な観点から検討した研究は多々あるが、それが文学や映画などの文化イメージとしてどのように表象されてきたのかを分析する研究は非常に少ない。本研究はそのような先行研究の欠如を受けて、既存のジェンダー研究に新しい角度からの検討を加えることを主な目的としている。

3. 研究の方法

本研究は学際的なアプローチをとっている。福祉や育児、少子化についての日米それぞれの政策を歴史的な視点から理解すると同時に、本研究においては雑誌や小説、映画などにおける「子育てをする男性」を新自由主義というイデオロギーと関連付けながら分析している。新自由主義が単なる政策ではなく人々の思考様式にどのような影響を与えてきたのかを検討するためには、文化的な作品を分析の対象とすることが重要である。

また、本研究において重要な位置を占める映画分析の部分では、メロドラマという概念に注目し、育児をする父親に観客が感情移入させられる一方で母親が悪者として表象される傾向があることを論じた。

研究の成果はアメリカ学会などの各種学会で発表するとともに、フェリス学院大学英文学会会誌などの雑誌論文においても公開した。また、2023年4月に発表した単著『「イクメン」を疑

え!』(集英社新書)において、このプロジェクトを「日米文化における育児をする男性の表象と新自由主義」という観点から総括するとともに、一般読者も理解できる形でこの研究の意義をわかりやすく説明した。同時に各種メディアにおける取材を通じ、単著の補足として書ききれなかったことを説明した。また、識者との公開対談を通じて研究内容に対する理解をさらに洗練させた。

4. 研究成果

「日本はジェンダー問題において遅れている」という言説の背後には「欧米諸国はジェンダー先進国である」という見解が潜んでいるが、アメリカにおけるジェンダーの諸問題を個人だけでなく社会という観点から再検討すると、アメリカにおいてもジェンダーの問題は根強く残っていることがわかる。それにも関わらず、日本社会はアメリカにおけるジェンダーの諸問題を批判的に検討してこなかった。特にアメリカ文化における「育児をする父親」は日本では一種のモデルとして受容されてきたが、その一方でそのような父親のイメージが人種的・階級的にも偏っており、母親をスティグマ化することにより成立していることはこれまで十分に論じられてこなかった。アメリカ文学や映画作品において白人中流階級の男性が理想的な「育児をする父親」として称賛される背景には、黒人や労働者階級の父親が「デッドビート・ダッド」としてスティグマ化されるということがある。特にアメリカにおける福祉政策は、「ウェルフェア・クイーン」とともに「無責任な黒人の父親」(デッドビート・ダッド)を糾弾することによって成立している部分が大きく、新自由主義的な自己責任論に依拠していると言える。その一方で、映画や文化作品の中の白人中流階級の父親は、福祉国家に依存せず仕事と家庭を独力で両立できる、いわば新自由主義の理想的な主体として表象されることとなった。したがって、個人主義や新自由主義の理念を無批判に許容するアメリカ社会のモデルをそのまま受容することは日本社会にとって必ずしも利益をもたらさないことを本研究では論じた。

日米の文化における「育児をする父親」の背後に新自由主義というイデオロギーが存在していることは極めて重要である。新自由主義的な価値観のなかで育児は一種のビジネススキルであると理解され、ケアが本来持つ意義が不可視化されている。新自由主義的なイデオロギーの中では育児は新手の「人的資本」として位置づけられ、「人的資本」の育成に携わりプライベートで得た経験をビジネスに活かせるエリート男性たちの育児は、単純で市場的な価値の低いケア労働に携わる女性(労働者たち)の育児と差別化されて理解されている。日本社会におけるジェンダー平等を達成するためには、市場のなかでは十分に評価されないケアの意義を再評価し、すべての男性にとって重要なものとして育児を再定義しなおすことが必要であると本研究は示している。

また、本研究では『クレイマー、クレイマー』『ミセス・ダウト』『幸せのちから』といったハリウッド映画を映画研究の知見を用いながら分析することにより、それらの映画が上記に示したような偏った男性像を示していることを論じた。また、その際に本研究ではそれらの映画がメロドラマという文化的なモードに依拠していることを論じた。メロドラマとは映画の一つのジャンルであるというより、ハリウッド映画全体に共通する一つの大きなモードであり、他の登場人物から誤認される道徳的な「善」を体現した登場人物に感情移入を誘う点に特徴がある。男性の育児を主題としたこれらのハリウッド映画のなかでは、男性主人公が感情移入の対象となる一方で、アメリカ社会のなかで育児を主に担ってきた女性は父親と子供の絆を阻害する悪役として描かれる。また、女性だけでなく「社会」や「法」もまた、これらの映画の中ではフェミニズムの理念を体現し女性の肩を持つ点で問題があると示唆される。女性よりも男性こそがジェンダー平等を体現した存在であると誤って表象される点が、これらの映画には共通していると言える。

最後に、「男性の育児」が見せかけのものではなく、本当に有益なものになるためには、女性の視点を組み込むことが不可欠である。本研究の中で具体例を示しながら論じたように、ハリウッド映画のなかでは概して子育てをする父親が「被害者」として位置づけられ、観客の感情移入を誘う一方で、母親は「悪者」として表象される傾向がある。「男性のつらさ」をことさらに強調する男性学には危険な側面もあるため、そこに女性の視点を取り入れながらケアの問題を多角的・重層的な問題として検討することが必要であると本研究は結論づけた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 関口洋平	4. 巻 54
2. 論文標題 日本の父親は遅れている？ 日英版『FQ』を読み解く	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フェリス女学院大学英語英米文学科 英文学会誌	6. 最初と最後の頁 5-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関口洋平	4. 巻 11
2. 論文標題 新自由主義とアメリカにおける保育	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Ferris Research Papers	6. 最初と最後の頁 4-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関口洋平	4. 巻 516-13
2. 論文標題 「『ヒルビリー・エレジー』における家族の表象と新自由主義」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『人文学報』	6. 最初と最後の頁 53-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 関口洋平
2. 発表標題 ホモ・エコノミクスと動物と家族 レイモンド・カーヴァーの『ジェリーとモリーとサム』を読む
3. 学会等名 アメリカ学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 関口洋平
2. 発表標題 「ハードボイルドな消費者 メークオーバー・ナラティブとしての『初秋』とロバート・B・パーカーの日本における受容」
3. 学会等名 首都大学東京・東京都立大学英文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yohei Sekiguchi
2. 発表標題 “Jazz and Japanese Post-war Democracy: A Critique of American Democracy in Out of This World.”
3. 学会等名 American Studies Association Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 関口洋平
2. 発表標題 「『ヒルビリー・エレジー』における家族と新自由主義」
3. 学会等名 アメリカ史学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 関口洋平	4. 発行年 2023年
2. 出版社 集英社	5. 総ページ数 220
3. 書名 「イクメン」を疑え！	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------